

Hip Joint news

(公財) 日本股関節研究振興財団会報

URL <http://www.kokansetu.or.jp>

E-mail info@kokansetu.or.jp

第6号 平成29年 7月

発行 公益財団法人

日本股関節研究振興財団

〒154-0011

東京都世田谷区上馬 1-13-11

電話 03-3421-6552

FAX 03-3421-6716

伊丹先生追悼の辞

慈大整形外科・伊丹家合同葬儀委員長
公益社団法人日本整形外科学会 理事長

丸毛啓史



伊丹康人先生、謹んでご逝去を悼み、生前のご指導に対し、改めまして御礼申し上げますとともに、お別れの言葉を申し上げます。

先生は、昭和14年に東京慈恵会医科大学を卒業され、直ちに、片山國幸先生が主宰されていた整形外科講座に入られました。しかし、間もなくの同年5月から終戦後の昭和21年5月にご帰国されるまでの間、陸軍の軍医として、現在の中国南部である南支那や、同じく現在のベトナムであるフランス領印度支那などの野戦病院で戦傷や腸チフス、パラチフス、赤痢などの病を患った傷病兵の手に東奔西走されました。そして、この7年の軍医生活の最後の1年は捕虜生活を余儀なくされるなど、大変なご苦勞をされました。この時の経験について先生は、**「壮絶な人間の死に直面し、またその周囲の人々の悲しみに接して、医師としての使命感を体得し、それからは勉強すること、努力することが苦にならなくなった。」**と述べておられます。同大学整形外科講座に復帰されるからは、昭和25年に講師、昭和27年に助教授、そして昭和41年に片山亮介第2代教授の後任として第3代講座担当教授に就任されました。先生は就任時の挨拶で、**「私はオーケストラのコンダクターに過ぎない。諸君がそれぞれの分野で調和**

を保って伸びていくことに対して全力を尽くす。私のこの考えに賛同する者はついてきてくれ。」とその決意を披露されました。そして講座員の学内、国内、海外留学を積極的に進められ、また整形外科関連の多くの学会のシンポジストやパネリストに講座員を推薦し、整形外科 Subspecialty 領域の人材育成に努められました。先生の後任の室田景久第4代教授は伊丹先生の教授退任記念業績集の中で、伊丹教授こそは、**「師の厳しからざるは怠りなり」という言葉を地で行かれた先生で、講座員に対する態度は誠に秋霜烈日、ごまかしや妥協を一切許さない厳しさがあった。一方では、休日の深更に及ぶまで講座員の論文作りの手伝いをされたり、遠隔地に赴任した講座員を激励して廻られるなどの深い人間味を持っておられたと述べておられます。伊丹先生の在職中の数々の業績につきましても、この記念業績集に詳記されています。昭和55年に定年退任するまでの14年間に、研究班として、病理班、細菌班、生化学班、硬組織班、電顕班、そして多くの臨床研究班を率いて精力的に研究、臨床に邁進し、これらの成果を78の主論文と421編の論文として発表されています。また、在職中に3人の他大学教授を輩出し、学内外の多くの要職につか**

れ、第17回日本手の外科学会ならびに第1回日米手の外科合同会議、第50回日本整形外科学会総会など多くの学会、研究会を主催されました。

教授ご退任後も、先生の学問への情熱が冷めることはなく、昭和63年には日本股関節研究振興財団を設立し、先生のライフワークであります、股関節外科、人工股関節に関する研究、開発を続けられました。

先生は、学術研究者として飽くなき探求心を持って整形外科の研究を推進されました。また、教育者として医学生や若手医師の指導にも熱心に取り組み、多くの後進を育てられました。

先生の整形外科医療と学問へ傾けられた情熱とそこにご遺志は、私たちが継承し、また後進に伝えて参ります。そして、日本整形外科学会の一層の発展のために日々精進していく所存でございます。先生のご遺影にお誓い致しますとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。お別れの辞とさせていただきます。

日整会誌第91号第4号264頁

より引用

弔辞

医療法人昭和 原田整形外科病院 (広島市)

理事 原田雅弘



お久しゅうございます。

こう云う形でお久しゅうございますと申し上げることは本懐ではございませんが、新しい年を迎えようかと云う年の暮、先生は私どもに大きなものを遺して彼岸に旅立たれました。

今年花落顔色改
明年花開復誰在
年々歳々花相似
歳々年々人不同

私の好きな劉廷芝の漢詩であります、人生無常の悲哀を感じます。

今年一月に「病で死ぬな、枯れて死ぬ」と題して長寿を味わい、時を楽しめと私共に諭された老後幸福論の二冊を遺し人生最後の年を悠然と過ごし従容と旅立たれました。羨ましい限りです。

将に有言実行の百二歳の人生でした。

私事ながら、私は戦前既に両親に先立たれ親戚の世話になって育ちましたが、中学時代は学徒動員のまま卒業延期となり、旧制の広島高校に入學後旬日にして被爆の憂き目に逢い両足の熱傷には蛆虫どもが巢喰い、吐血、下血、脱毛と形通りに進行して月余に亘り寝たきりで休学し、それが癩で教室には余り姿を見せない死に損ないの臍曲がりの広高生でしたが、大学に入ってから父と同期であった片山良亮先生、助教教授であった伊丹先生の厳しい御指導の下、学を修め業を習って今日を迎えることが出来ました。今年初頭に別府先生の手によって発行された伊丹先生の「病で死ぬな、枯れて死ぬ」の著書の中に 第一、第二、第三の

人生」と云う項があります。

学校を出て親の脛を齧ることから離れて第一の人生は始まる。何故生きる」などと考えている閑のない、結婚、育児、そして生活と仕事と一所懸命に働かねばならぬ時期が第一の人生である、と云う訳です。先生はこの時期多くの教授を育てて来られました。そして定年退職後の第二の人生では趣味や旅行を楽しんで夫婦は過ぎ来し方を振り返りながら七十歳位まで過ごすことになるが、この時期までは「なぜ生きる」と云うことなど考える閑のない人生が続く。ところが第三の人生、八十にもなるとそうはいかなくなる。

晩期高齢者、介護保険など怪しい言葉が並びます。こうならないように過ごせるよう毎日毎日をピンコロリの精神を持って過ごし、枯れて死ぬまでは生き甲斐を持って生きられるように予め考えておきなさいと云う人生訓であります。

なぜ生きる」ではなく、なぜ生きねばならんのか」を考えておく必要がある。常に新しいことに挑戦して生きること心掛けなさいと云うことです。

先生は慈恵医大の教授のあと神奈川リハビリテーションの病院長を勤められ、更に私財を投じて日本股関節研究振興財団をつくられ理事長として股関節外科の多くの人材を育てられました。

そして百歳を超えて尚開業の第一線に立っておられました。

そう云った精神を支えていたのは先生の同郷の士、彫刻の平櫛田中さんなのでしょう。もう随分前のことですが、先生から「今やらねばいつ出来る、わしがやらねば誰がやる」という田中さんの書を

贈って頂きました。私自身、人生の岐路に立っている時でした。これを乙旗として事に当たりました。この額は病院の職員入口に掲げております。田中さんの言葉には「六十、七十、鼻垂れ小僧、男盛りは百から百から」と云うのもあって伊丹先生の大好きな言葉でした。

伊丹先生とは学三の頃、研究室に入り込んでお手伝いさせて頂いていた頃からちょうど七十年になります。その間家族ぐるみでお世話になって、あちこちの学会には誘って頂きお供させて頂きました。

一番有難いと思ったことは、学ぶと云うことの手法を教えて頂いたことでした。「生涯現役」と子供や孫たちにそそのかされて家内ともども病院を守ってありますが、私は診療だけ、経営は大蔵大臣、労働大臣ほか一切を息子と家内に任せて生涯現役を貫く所存です。

折に触れてご指導頂き可愛がって頂きました息子も還暦となり、日整会や臨床整形外科学会のお手伝いをさせて頂き丸毛理事長とも管鮑の交わりを楽しんでいるよう有難く思っております。

浮生は夢の如し
昔々学位記を頂いた時先生の手の汗とペン痕の残っているキヤムベルの手術書を拝領しましたが折に触れ忘れ癖のつきかけた私を睨んでくれております。

永い間有難うございました。
心からご冥福をお祈り申し上げます。 合掌

弔辞

慈大整形外科同窓会

会長 高濱晶彦



伊丹 康人先生が整形外科の主任教授に就任されたときに、私、高濱晶彦は、菅正隆先生など5人の仲間と教員として入局を許され、現在、慈恵医大整形外科同窓会の会長を務めさせていただいています。

伊丹先生が教授に就任された時期は、形成外科の設立も決定され有力な整形外科のメンバーは、形成外科に移られ、多くの出張病院に出られる先生方も多く、大学の教室スタッフは、非常に少なくなり、私達、新入医局員5人が、雀の子のように集まり、頭をつきあわせ、毎夜症例の検討会を自分たちで行い、勉強しました。またインターン闘争の始まりもあり、入局する局員は3年程なく、400名以上の外来や、140名近い入院患者の対応に追い回される私どもを、暖かく見守り、指導していただきました。

私の結婚式には、奔馬のごとく走る私に、止まっても考えるよう「馬車よ走るな」とのお言葉を頂戴したのも懐かしく思い出します。

私の開業時には来賓でおいいただき、古代中国に医療を伝えた神農と中医学の始祖、黄帝の絵と、励ましのお言葉を頂戴しました。

また開業後も時折り、伊丹先生から近況を訪ねる電話をいただき、開業の状態や、教室からの応援状況や筋肉と関節、運動の効果を熱くお話をいただきました。

伊丹先生は、生涯現役を目指し、市井の整形外科医療に、従事したいという強い熱意を持たれ、公益財団法人理事長を兼務しながら整形外科医院を開業されました。その折のリハスタッフの事前教育を私に3ヶ月ほど任せてくださいました。

その後も伊丹先生は、現在、日本整形外科の主要

な治療目標となる運動器症候群、ロコモティブシンドロームに先立つ4半世紀前に、生活習慣病の発生、サルコペニア、筋肉減少状態の軽減・解消について、運動の重要性を認識され、医学体操を始められました。

私も18年前、入院治療中止とともに外来とともに、体操教室を併設し、現在100名を超える人々が、体操のみを目的に訪れています。

定年退職後は余生ではなく、本当の人生の始まりであり、自分の身体を守る責任と義務について、日頃から警報を発し続け、実践・実行されていきました。

伊丹先生から教えて頂いた

おはようございます」と言う明るい心、
「ハイ」という素直な心
「お元氣ですか」という気遣う心
「済みません」という反省の心
「松がします」という積極的な心
「有り難う」という感謝の心
「お陰さまで」という謙虚な心
相手の立場を自分の置き換える心

と言う「穴つの心」を、皆様にお伝えし、また大切にしてお過ごしに行きます。

日頃、病で死ぬな、枯れて逝け、ピンピン生きて、ころりとあの世に行く」と仰っておられました。本心に有言実行・実現されました。

生涯にわたり、師の道を歩まれ、長い間の指導を受け感謝しております。本心に、長い間、有り難うございました。

心からご冥福をお祈りいたします。合掌

伊丹先生の旅立ち

公益財団法人日本股関節研究振興財団

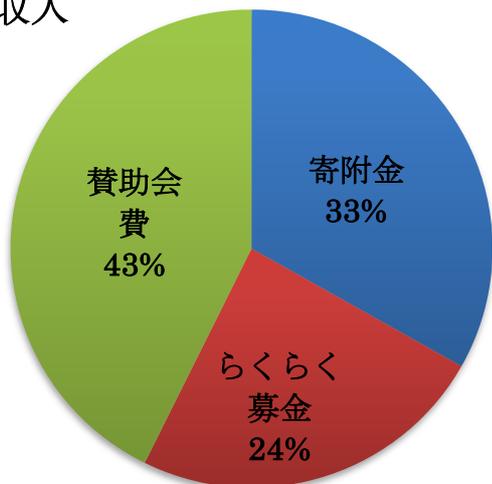
理事長 別府諸兄



伊丹康人先生は平成28年12月22日逝去されました。享年102歳。葬儀は東京慈恵会医科大学整形外科講座と伊丹家との合同葬で東京都青山葬儀所にて営まれました。先生は私財を投じて、昭和62年には日本股関節研究振興財団を創立されました。平成23年に内閣府より公益財団法人として認可され、股関節の研究に対する支援、普及啓発活動、股関節の海外研修に対する支援、運動器健康寿命延伸活動、股関節研究セミナー、股関節市民フォーラムなどを長年にわたり行っています。創立以来30年間にわたり約1億5千万円の研究支援を行ってまいりました。その後財団の活動のみならず診察も継続され、気が付くと先生は、90歳代に入られていました。自分の身体は自分で守る」という言葉をご自分に言い聞かせ、足腰を鍛え、食事に気を付け、規則正しい生活を続けられていました。100歳を過ぎても白衣を着て、リハビリ室で患者さんを診ておられました。本当に医師という仕事が好きでした。年を取られることにむしろ穏やかに静かに過ごされ、まさに枯れていかれました。そして、ちよつと体調を整えて頂こうと入院した母校の病院で、3日間寝ただけでスーツと旅立ってしまった先生がいつも見上げていた東京タワーに見守られての旅立ちでした。102歳で先生最後の本病で死ぬな、枯れて死ぬ」の考えを実践した幸せな最後だったと思います。

「寄附金・らくらく募金・賛助会費決算報告」

収入

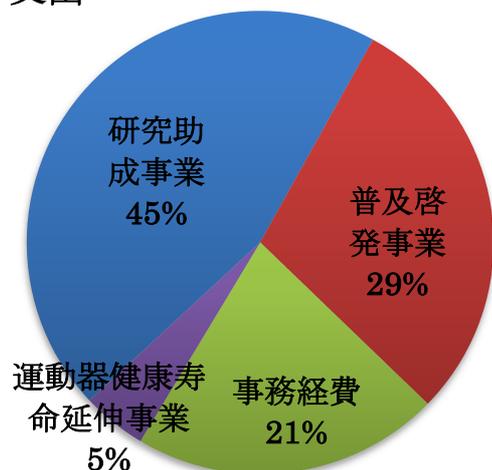


平成28年度に当財団が皆様からお預かりした寄附金・らくらく募金・賛助会費の総額は、12,280,000円でした。そのうち5,522,000円が助成金として股関節の研究のため、3,591,000円が普及啓発事業のため、550,000円が運動器健康寿命延伸事業のため、2,617,000円が事務経費となり、財団の活動に大きく貢献する結果となっています。

収入	金額 (円)
寄附金	4,076,000
らくらく募金	2,962,000
賛助会費	5,242,000
合計	12,280,000

※1,000円以下四捨五入

支出



※普及啓発事業の主な事業は、市民フォーラムです。運動器健康寿命延伸事業の主な事業は、運動器健康寿命延伸体操(ロコモ体操)講習会です。

事業名	金額 (円)
研究助成事業	5,522,000
普及啓発事業	3,591,000
運動器健康寿命延伸事業	550,000
事務経費	2,617,000
合計	12,280,000

※1,000円以下四捨五入

平成29年度股関節海外研修助成交付者決定

平成29年度股関節海外研修助成の交付者が、16名の応募者より、次の3名に決定いたしました。この度の股関節海外研修助成では、米国の東海岸の研究施設を中心に、研修を予定しております。

下記の3施設と交渉しております。

- デューク大学
- ホスピタルフォースペシャルサージェリー
- ポストン チルドレンズホスピタル



神戸大学
整形外科
林申也先生



広島大学
整形外科
庄司剛士先生



紺整会
船橋整形外科病院
田巻達也先生